

雪国の植物 ユキツバキ 31

主に新聞に掲載のユキツバキの記事を拾う(その2)

石 沢 進

本誌31号に「雪国の植物 ユキツバキ 22 主に新聞に掲載のユキツバキの記事を拾う」(主に1996年以降)の題で紹介したが、この度池上義信先生の収集した「離弁 ツバキ」のまとめの中にツバキの記事が多数保存されていたので、古い時代の記事が多く保存されており、31号に掲載したものと重複するものはほとんどなかった。

[ユキツバキに関する掲載記事など]

- 珍重がられる白色「ユキツバキ」
大評判「キリン山産」 米国からも“種子を送れ”
新潟日報 1953(昭和28年)11月4日
東蒲キリン山の「ユキツバキ」の種子が、外国の植物学者の間で珍重がられている。
- 雪ツバキが渡米 酒井さん秘蔵の15株
朝日新聞 1955年(昭和30年)8月26日
十日町市吉田酒井武一さんの秘蔵の雪ツバキがアメリカで栽培されるとの報道。
- 花の世界にも”白い手” ユキツバキ 一足先に品種改良
新大農学物産教授 手放しでは逆輸入
新潟日報 1959(昭和34年)8月5日
ユキツバキが外国で品種改良されて逆輸入される可能性が大きいと警告
日本自生の植物に関心を深め、自ら品種改良の必要性を指摘。
- 両津 ユキツバキの保存会できる
朝日新聞 1963年(昭和38年)5月23日
両津市教育委員会は佐渡の山中のユキツバキの保存会づくり、保護を報道。
- 県の木 ユキツバキに決まる 圧倒的な得票数 準にマツとシダレヤナギ
粘り強い県民性象徴
毎日新聞 1966年(昭和41年)8月28日
県民の投票結果を受けて県の木選定委員会で決定したことを掲載。
- 雪に負けないユキツバキ 新潟県の木
毎日新聞 1966年(昭和41年)8月28日
上記記事の裏面に全国向けに「新潟 県の木」の決定記事を掲載。
- 雪ツバキにひかれて さあ野へ山へ
逆境に耐える 県民性のシンボル
朝日新聞 1968年(昭和43年)3月28日
加茂のユキツバキ祭りや新大農学部や社会人によるユキツバキの品種を紹介。
- 佐渡でユキツバキ満開(写真 両津市赤玉の杉池広葉樹林で)
朝日新聞 1970年(昭和45年)5月15日
ミズバショウと一緒に満開であることを紹介
- ユキツバキの新種二つ発見 両津 新種の「モモイロオトメホホジロユキツバキ」(写真)
朝日新聞 1970年(昭和45年)5月26日
北見秀夫先生の命名のユキツバキ、他の一種「オトメホホジロユキツバキ」を紹介。
- ユキツバキに新品種 佐渡で二つ見つかる
新潟日報 1970年(昭和45年)6月22日
北見秀夫先生の発見を紹介
- 恋えしたの? ユキツバキ 鹿瀬で狂い咲き
新潟日報 1971年(昭和46年)10月8日
- 広げよう みどりの輪 8 指定しつ放しの県 有名になり”被害”ふえる 県の木嘆き
読売新聞 1972年(昭和47年)1月13日
- 窓辺欄 ★ユキツバキ★ ハチ植えに向くー
毎日新聞 1972年(昭和47年)4月11日
- にいがたの花 8 ユキツバキ 新潟女性に似た特性 花の色も多種、海外で好評
新潟日報 1973年(昭和48年)9月29日
- 満ちる静かな感動 岡山たつ子 歌集 ゆきつばき(県人出版物)
新潟日報 1980年(昭和55年)2月11日
- ユキツバキと茶が“結婚” 栃尾山中に珍種 淡桃色の上品な花「炉開き」と命名
新潟日報 1981年(昭和56年)5月3日
- ユキツバキと茶が自然交配「炉開き」を天然記念物に 栃尾市が指定 学術的に貴重な原木
朝日新聞 1982年(昭和57年)3月9日
- ユキツバキの珍種 天然記念物に 栃尾 その名は「炉開き」

- 雪の中淡いピンク 茶と自然交配で咲く
毎日新聞 1982年(昭和57年)3月11日
- 珍種「炉開き」初めて実結ぶ 栃尾・八木さんの原木
新潟日報 1984年(昭和59年)10月30日
 - ユキツバキと二年ぶり再会
新潟日報 1985年(昭和60年)8月8日
 - 「ユキツバキ」の絵 変です 年賀はがき「あれはヤブツバキ」
「花や花糸の形違う」学者指摘 信越郵政局「回収は困難」
朝日新聞 1986年(昭和61年)11月7日
 - 年賀はがきのツバキ 制作者の川合上教大教授が見解
テーマは「淡雪とツバキ」
標本図でなくあくまで芸術
新潟日報 1986年(昭和61年)11月11日
 - ユキツバキ300本 そっくり寄贈 東大名誉教授坂口謹一郎氏
丹精15年を上越市へ 高田公園に移植新名所に
朝日新聞 1987年(昭和62年)10月7日
 - 私とあの人 小林幸子 新潟市出身の作曲家・遠藤 実さん 母へ思い込め「雪椿」作曲
新潟日報(夕刊) 1989年(昭和64年)9月28日
 - 雪国ある記 雪椿
朝日新聞 1990年(平成2年)3月20日
花卉は紅、花糸は黄 え・小野誠一郎を掲載
 - 新・ふるさとを描く ゆきつばき 15号(65・0 × 53・0センチ)
桐生照子(絵画)
新潟日報 1993年(平成5年)2月9日
 - 盗採もうやめて シロバナユキツバキ 群生地に看板
両津
新潟日報 1993年(平成5年)6月5日
 - 夜桜ライトアップ 見どころたっぷり 来月10日開幕
加茂・雪椿まつり
新潟日報 1994年(平成6年)3月12日
 - ユキツバキ(加茂市) 心和む華やかな色
朝日新聞 1996年(平成8年)4月24日
青海神社周辺に広がる加茂山公園のユキツバキを紹介
 - 年賀はがき 県内版図柄 番場さん(加茂出身) 描く「越後の雪椿」
新潟日報 2000年(平成12年)9月6日
2001年のお年玉付き年賀ハガキの図柄に雪椿に描く

ツバキ

- 大椿を記念物指定申請
東日本新聞 1934年(昭和9年)12月7日
佐渡西三川村田切須の大椿を天然記念物指定方を文部省に申請。
- 行って見たら えと文 根本 進 花ひらくツバキ
朝日新聞 1964年(昭和39年)1月22日
- 園芸 4月の記念樹 ツバキ
寿命長く、めでたい木 細工物にも向く材質
日本経済新聞 1966年(昭和41年)4月7日
- 自然のこよみ ツバキ 花の前線北上中
朝日新聞 1967年(昭和42年)2月6日
- 沖縄のツバキ [学芸欄] ウメでなくツバキの松竹梅/赤一重のツバキのかんざし/白班の 小輪の名花もまじる
渡辺 武
毎日新聞 1971年(昭和46年)3月19日
- 文化 つばきの宝庫佐渡 中野敬止
新潟日報 1974年(昭和59年)5月14日
羽茂 松永の水田をめぐるヤブツバキの大木群を写真で紹介
- 中尾佐助 日記から ツバキとサクラ
朝日新聞 1975年(昭和50年)3月24日
- 寒ツバキ満開 白一色の佐渡島
朝日新聞 1976年(昭和51年)1月25日
島内が大雪で白一色に包まれた状況でツバキが開花
- 椿 春を呼ぶ 花の咲く季節を前に 渡辺 哲
新潟日報 1976年(昭和51年)3月11日
- 丹精込めたツバキ212本寄贈 宮尾さんが市園芸センターへ
失明のため水やり困難 完全管理市の手で 貴重な「椿花図譜」添えて
新潟日報 1976年(昭和51年)5月12日
- はい科学部です 優雅な模様はウイルス病 にゅーす・らうんじ
ツバキの花びら つぎ木による繁殖で病気まで子孫に伝承
朝日新聞 1977年(昭和52年)10月25日
- 色あせた佐渡ツバキ 今は昔 天プラ油、整髪剤、花香…… 日曜レポート
百年大木もバッサリ 公園、街路樹…保存模索も
明治初期まで「御林」が存在 五百俵も集め県内精油所へ山取りをして園樹に育てる
新潟日報 1982年(昭和57年)1月19日
- 花物語 February ツバキ 日本人の生活文化に深くかかわって 萩屋 薫
日本原産から世界のツバキへ 名椿を生んだ元禄時代のツ

- バキブーム
「椿姫」のヒロインがつけていたのは白ツバキ(ツバキの花ずし)
朝日新聞 1989年(平成元年)3月18日[全面広告]
- ツバキ 花に想う⑧ 切り絵・文 片山昭一(切り絵作家・新発田市)
新潟日報 1990年(平成2年)8月22日(夕刊)
切り絵の作品を掲載
- 各地のツバキ300種 8日まで東京で展示会
朝日新聞 1993年(平成5年)3月6日
一輪ざしなど、簡単な生け方を実演して見せる安達瞳子さん(写真掲載)
- 国道拡幅で「緑のトンネルを考える会」 ツバキの群落残そう
保存求め現状を記録 小木
読売新聞 1993年(平成5年)6月30日
緑のトンネルを調査する住民
- '95にいがた芸術作家 色紙展作品 椿花 名古屋 礼子(三条市)
朝日新聞 1995年(平成7年)4月13日
- 園芸 ツバキ 春の彼岸前後が植え付けの適期
朝日新聞 1995年(平成7年)3月13日
- 家庭 椿を造園家が送り続け 脱サラ画家が描いた 東京で展示
朝日新聞 1996年(平成8年)1月29日
「画家というより職人に近い」川岸富士男さん(写真)で紹介

- [花と緑]小鳥の来る花 輝く常緑の葉 ツバキ
朝日新聞 1999年(平成11年)2月9日
- 花を育てる 梅雨時の挿し木 根出るまで水やりを
新潟日報 1993年(平成5年)7月9日
- 江口富美子 髪洗いに重宝 ツバキの油粕
朝日新聞 1999年(昭和58年)4月2日
- 生活トピック 珍種で大ウケ混血花木 欧米で改良、里帰り
ツバキ・シャクナゲ・ツツジなど “直輸入”するマニアまで
掲載新聞?年月日?
- 花と緑 金花茶 長年の夢の椿 種間交配進む
朝日新聞 1997年(平成9年)2月11日
- ツバキの苗(広告)
平田ナーセリー つばき 平成8年9月
農林中央金庫 新潟支所 つばき(花シリーズ No.23)
椿華園(大岡徳治)新潟の椿
- ツバキのカット・版画(広告)
FUJITA (ツバキ)の花カット 対談 街と装い
朝日新聞 1988年(昭和63年)11月21日
声 ツバキ 朝日新聞 1992年(平成4年)1月29日
声 つばき 朝日新聞 1994年(平成6年)1月24日
- '98にいがた芸術作家 色紙展作品
新潟日報 1998年(平成10年)3月1日
版画・渡部清勝
朝日新聞 1998年(平成10年)9月25日
水墨画 阿久津洋子、市民ノートの(ツバキ)花
新潟日報 2001年(平成13年)8月14日

1

総合

12版

(昭和16年7月30日第三種郵便物認可)

新 潟 日 報

(日刊)

2006年(平成18年)5月22日(月曜日)

日報抄

森林浴の季節。日本は先進国の中で有数の森の国である。だが十七世紀半ばの日本は乱伐が招く文明崩壊の危機が現実味を帯びていたと、カリフォルニア大学のジャレド・ダイアモンド教授はいう。

▼長く続いた戦国時代の影響や天下平定後の大規模な築城と城下町造りなどで、広大な森林が失われたのである。徳川家康が築いた三つの主な城だけで、約二十五平方キロの森を伐採する必要があったという。山の保水力は損なわれ、相次ぐ洪水と凶作に人々は苦しめられた▼(こ)までは、多くの文明がたどった典型的な衰退への道である。だが江戸幕府は豊かな緑を回復し、持続させることに成功する。背景をジャレドさんが欧米人の視点で分析した「文明崩壊」(草思社)が興味深い▼森林破壊による災害に直面した江戸幕府は、一六六六年に乱伐の危険性を警告する。ち密な森林保全策を受けて林学者が育林の研究を行い、農村を指導した。泰平の世が続き、波乱の少ない未来を予測できた時代、農民は子孫のために植林に力を入れた▼環境を保全し、持続可能な社会を実現するには、長期的な視野に立つた社会全体の合意が欠かせない。地球規模で環境破壊が進む中でどうすればそれが可能か。江戸の知恵に、外国の研究者も注目している▼「いにしへの人の植えけむ杉が枝に露たなびく春は来ぬらし」。万葉集の歌である。「湿潤のもと、水木相生ず」として、水源林の禁伐を定めた八二年の太政官符は、世界最古の保全立法だと立正大学の富山和子名誉教授はいう。森の澄んだ空気を吸いながら、連綿と受け継がれてきた緑の歴史に思いをはせたい。